

【活動報告】

令和7年度東京都公文書館夏季企画展示

「江戸の地誌・絵図 ～その系譜をたどる」

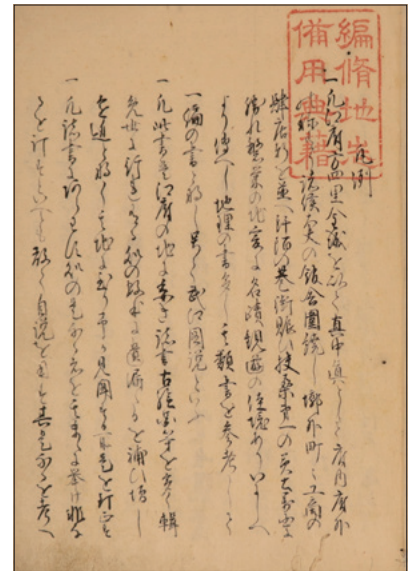
東京都公文書館 史料編さん担当

安部 玄将

はじめに

東京都公文書館が所蔵する資料には、「編脩地志備用典籍」という蔵書印が捺された地誌や絵図がある。これらの地誌・絵図は、19世紀に江戸幕府によって本格的に地誌編さん事業が開始された時に収集された資料で、このうち武蔵国、とくに江戸を中心とした地誌・絵図の一部が東京都公文書館に引き継がれている。

今回の企画展では、これら当館所蔵の地誌・絵図を中心



「江戸図説」（請求番号：C1-132）と「編脩地志備用典籍」印

として、江戸とその周辺を対象とした地誌・絵図の展開過程を紹介し、都市江戸の発展、都市文化の成熟と関わって変化していく地誌・絵図の姿をたどれるよう構成した。

本稿では、企画展の概要、関連コンテンツの展開およびアンケート結果を報告する。

展示期間：令和7年7月18日～9月16日

1 展示構成および概要

展示構成は以下のとおりである。

第1章 江戸時代前期の地誌・絵図～名所記の自立、大型江戸図の成熟

第2章 江戸幕府の地誌編さん事業と「御府内備考」

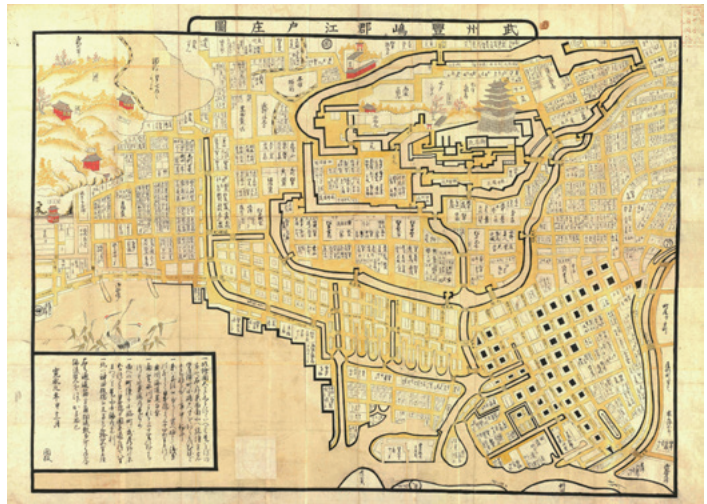
第3章 江戸時代後期の地誌・絵図～名所図会の完成、分割絵図の普及

(1) 第1章 江戸時代前期の地誌・絵図～名所記の自立、大型江戸図の成熟

第1章では、江戸時代前期、17世紀初頭から18世紀前半までを対象として、地誌および

江戸図の成立から成熟過程を紹介した。江戸の地誌は、物語としての仮名草子に名所案内的要素を含んだものに淵源をもつといわれている。その中から名所案内を目的とした仮名草紙が生まれ、やがて実用性を兼ね備えた名所案内記として自立していくというプロセスをたどり、その内容を多様化させていった。

一方で江戸を対象とした刊行図に注目すると、完成しつつある初期城下町を中心に、絵画的要素が特徴的な「寛永九年江戸図」（寛永9年〈1632〉、請



「寛永九年江戸図」

求番号：654-05-01-09（ZA-043）が最初の江戸図とされている。その影響を受けて類似した絵画的表現内容を有する絵図群が続くことになる。

その後、遠近道印（おちこちどういん）という地図製作者により、詳細な測量を踏まえて方位縮尺の正確さを極め、「寛文五枚図」と称される「新板江戸大絵図」（寛文10年〈1670〉請求番号：654-05-01-17（ZA-040））・「新板江戸外絵図（4枚）」（寛文11-13年〈1671-73〉、654-05-01-19～22）の方向へと発展し、さらにこれを前提に1枚にまとめた大型江戸図へと転換していく。「分間江戸大絵図」（延宝4年〈1676〉、請求番号：654-05-02-01（ZA-084））等がこれに当たり、これ以降、大型江戸図は情報を更新しながら刊行を続けていく。遠近道印はさらに工夫を凝らし、「寛文五枚図」を折本形態の地図帳にするという画期的な刊行物「江戸方角安見図」（延宝8年〈1680〉）を編み出している。当館は、同史料を所蔵していないため国立国会図書館デジタルコレクションの画像（<https://dl.ndl.go.jp/pid/2575023>）を利用し、当館職員が複製本を作成し、手に取って御覧いただけるようにした。

元禄期に至ると、正確さよりも見やすさを追求し、付加情報を盛り込んだサービス精神あふれる大型絵図も刊行されるようになる。たとえば、「江戸図鑑綱目」（請求番号：654-05-02-11（ZA-058、ZA-098））では、絵図と江戸ガイドブックのセットで販売するという趣向が取られる。

都市江戸そのものの拡張と正確さの追求は江戸図の大型化をもたらしたが、その過程でさまざまな付加情報を掲載するなど多様な展開を見せ、17世紀末には成熟の時を迎えた。



「江戸方角安見図」（国立国会図書館所蔵）の複製

（2）第2章 江戸幕府の地誌編さん事業と「御府内備考」

第2章では、江戸幕府による、江戸を中心とした調査・編纂の成果物である「御府内備考」を紹介するとともに、調査・編纂を担当する地誌調所が収集した「編脩地誌備用典籍」の中からユニークな地誌や絵図を紹介した。

19世紀に入ると、幕府による全国的な地誌編纂事業が開始される。まず享和元年（1801）頃、日本各地から地誌を収集し、これらを編さんして日本全体の地誌をまとめ上げようとする文化政策が計画された。享和3年には昌平坂学問所の中に地誌調所が設置され、当初は地誌資料の収集と目録・解題の執筆にあたった。収集された地誌や絵図の中には、刊行されたものはもちろん、写本でしか伝来していないものもあり、19世紀前半期に本格的な収集事業が行われたことには大きな意味があった。



「御府内備考」展示風景

文化7年（1810）から関東諸国を対象とした「新編武蔵風土記稿」（請求番号：C I - 0 0 1 ~ 0 8 0）「御府内備考（正・続）」（請求番号：D G - 1 6 2 ~ 2 7 3 ・ D G - 2 7 4 ① ~ 4 2 2）などの調査と編集作業が継続されていった。

（3）第3章 江戸時代後期の地誌・絵図～名所図会の完成、分割絵図の普及

第3章では、幕府による官選地誌編纂事業が成果を得た後、天保期から幕末期を対象に江戸絵図と地誌のトピックスを追った。江戸初期以来の先行作品の成果を踏まえ、時には意識的に批判を加えながら進化・発展を遂げてきた江戸図と江戸地誌、幕末に花開いた作品群を紹介した。

すでに1章で一枚物の江戸図が発展・完成を遂げたことを紹介したが、巨大都市江戸に精細な情報を織り込んで表現する江戸図は大型化し、実用の点では難点を抱えていた。それを克服するための努力は地図帳というアイデアや、地誌に記される特定の方面を描いた分割図などに見いだすことができるが、幕末に至り、金吾堂板、尾張屋板切絵図の大ヒットとして結実する。ここでは、刊行された切絵図の先駆的業績である吉文字屋板切絵図と合わせて紹介した。



第3章 展示風景

一方、先行する作品に考証を加えて加筆修正を行うことで発展を遂げてきた江戸地誌は、天保5

年（1834）、同7年に刊行となった「江戸名所図会」において集大成をみる。編纂開始から足かけ40年をかけて行われた精緻な調査と考証はもちろんのこと、本書の挿入図がもつ高い写実性と、俯瞰して名所の実際を目の前に再現させるようなリアルな描写は従来の江戸案内記と一線を画するものであった。本章では、「江戸名所図会」（請求番号：江戸明治期史料004720～004739）に描かれた浅草寺の鳥瞰図を接合して、風雷神門から本堂、奥山までを一望できるように構成したパネルを設置した。

2 展示の取り組み

江戸図の形状は大型化していくが、文字情報自体はかなり細かい字で書かれている。展示ケースに入れて展開することはできず、立面ケースの壁面に展開すると、来館者には字がよく見えない。そんな展示上の困難がつきまとう存在である。

今回は、切絵図など小サイズのもののは実物を展示したが、大型絵図は極力大きめのパネルを作成し、あわせて手に取って見られる複製本や、大型床面シートを用意し、じっくり見て読み込んでいただける工夫を施した。

約5メートル四方の大型床面シートとして作成したのは「江戸傍近図」（請求番号：654-02-03-05（ZA-118））である。寛政6年（1794）11月、地理学者・古川古松軒が幕府に提出した、武蔵国の江戸御府内以外を対象とした地図で、ほぼ江戸十里四方の内にある村々の位置と、街道、地形、名所旧跡の位置を示し、河川や用水についても詳しく記している。また、各村の風土を「上々」や「下々」のようにランク付けしていることも興味深い。デジタルアーカイブ用に撮影した高精細画像を利用したので、特大絵図に拡大しても文字を鮮明に読んでいただくことが可能となった。

常設ミニコーナーでは、「企画展こぼれ話」として、江戸周辺の古物調査の記録である「武蔵野古物」（請求番号：CR-102）などを展示した。さらに、手書き割絵図である「江戸総絵図」（請求番号：654-02-02-01（ZB-001）～（ZB-009））の展示を行った。「江戸総絵図」は、元禄年間（1688-1704）のはじめ頃成立と推定されている。絵図に描かれた道路や水路などの線に沿って9枚に分割され、ジグソーパズルのような



大型床面シート「江戸傍近図」



「江戸総絵図」展示風景

きわめてユニークな形態となっている。したがってこれを接合してみても方形とはならない。それぞれが独自の形をもち大きさも異なる分割図ではあるが、これを折りたたむと各図が同じ大きさになっていることにも驚かされる。

また、展示室の外の通路（アーカイブウォール）でも、本企画展に合わせた展示を行った。ここでは、当館所蔵の近吾堂板、尾張屋板、吉文字屋の切絵図の画像を拡大印刷して、壁面に展開した。切絵図の細かな描写を間近で見ることができ、観覧者からも好評を博していた。



アーカイブウォールでの「切絵図」比較

3 関連事業の取り組み

本企画展の開催にあわせて、関連事業を展開した。以下ではそれぞれの取り組みについて報告する。

(1) 関連講演会

企画展に関連して、9月2日（火）に講演会を開催した。目白大学社会学部教授の鈴木章生氏をお招きし、「近世地誌の系譜－江戸の地誌は何を記し、何を伝えたか」と題して御講演いただいた。また、当館職員の西木浩一が「江戸絵図の系譜」と題して展示を解説した。

講演会の参加者は38名で、そのうち32名の方からアンケートの回答を得た。それによると、参加者の居住地は多摩地域48%、23区内28%、都外



関連講演会の様子

24%と、近隣市町村の方が半分を占めた。年齢層は20代2%、30代0%、40代9%、50代22%、60代41%、70代以上26%であった。「今回の講演会をどちらでお知りになりましたか」という質問には、「ポスター・チラシ」46%、「ホームページ」30%、「お知り合いの方から」11%、「SNS」7%、「その他」6%という結果であった。

「これまでに当館主催の講演会に参加したことがありますか」という質問には、「初めて参加する」63%、「2回目」25%、「3回目」6%、「4回目」6%という結果で、約6割の方が初めて参加された。講演内容については、「大変良かった」78%、「良かった」19%、「ふ

つう」3%、「良くなかった」0%と好評で、「絵図がどのような流れで発展していったのかが良く分かった」、「地図に関する講演会はあまりないので、今回はとても参考になりました」といった感想が寄せられた。

（2）動画配信

当館では、令和3年以降、企画展の紹介動画を公開している。本企画展でも動画を作成し、令和7年11月25日から公開している。

(<https://www.youtube.com/watch?v=-QSBaAupbHk>)

おわりに

最後に来場者アンケートの結果を紹介する。開催期間を通じて62名の方からアンケートの回答を得た。回答者の居住地は、多摩地域63%、23区20%、都外17%で近隣市町村からの来館者が多かった。

年齢層は12歳以下3%、13～19歳0%、20代6%、30代10%、40代10%、50代29%、60代29%、70代以上13%で、50代以上が7割を占めた。若年層への普及活動が今後の課題と言えるだろう。「東京都公文書館をご存知でしたか」という質問には、「今回初めて知った」28%、「知っていたが利用したことはない」39%、「以前から知っていて、利用した事がある」33%であった。

「この企画展を何でお知りになりましたか？（複数回答）」という質問には、「掲示ポスター」24%、「配布チラシ」16%、「来館して開催を知った」16%、「当館ホームページ・SNS」13%、「知人からの紹介」9%、「周辺を散策していた」9%、「テレビ・新聞・ラジオ」1%、「その他」12%という結果で、ポスターやチラシによる宣伝効果が大きかった。

企画展の内容については「大変よかった」57%、「よかった」37%、「ふつう」6%とおおむね好評で、「江戸時代の古地図のみならず、江戸時代の文化、歴史、生活（特に一般庶民の人々の生活）、風俗等が詳細に理解できる絵図なども展示されているのがよかった」、「江戸傍近図」の大型床面展示は大変興味深く拝見しました」という感想があった。一方で、展示資料の文字が小さいため、展示ケース奥の史料が見えづらかったという指摘もあり、展示方法についてまだまだ工夫が必要とされる。

本企画展で展示した地誌・絵図の多くは、当館のデジタルアーカイブズでも閲覧可能である。企画展をきっかけとして当館所蔵史料の利用促進につながるよう継続して取り組みたい。